

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 13 日現在

機関番号：55401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520489

研究課題名（和文） 地域に即した看護コミュニケーションのための基礎資料の作成

研究課題名（英文） Creation of the underlying data for the nursing communication adapted to the area

研究代表者

岩城 裕之（IWAKI Hiroyuki）

呉工業高等専門学校・人文社会系分野・准教授

研究者番号：80390441

研究成果の概要（和文）：医療現場で患者が方言を使用した際、医療関係者が方言を解さないためにコミュニケーションがうまくいかない実態を調査した。その結果、看護コミュニケーションに必要な語彙が抽出でき、同時に、主要な問診場面でのシナリオが作成できた。この成果を利用し、医療現場で方言が通じにくい問題の解決をはかるためのツールの開発を行った。その一つが共通語と方言と対照できる問診場面の映像教材である。また、研究期間の途中で起こった東日本大震災を受け、災害時に利用できる方言の手引きを作成し、インターネット上で公開している。

研究成果の概要（英文）：

When a patient used his or her dialect at the medical scene, medical staffs are not often able to understand his or her dialect in Tsugaru.

So, we made some tools to solve that problem. One is "handbook of dialect for nurses", and the other is "video movie of medical scene".

We exhibited them on the Internet.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21年度	900,000	270,000	1,170,000
22年度	600,000	180,000	780,000
23年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言

1. 研究開始当初の背景

高齢化が進み、医療・看護・保健・福祉等の分野での様々な問題がクローズアップされている。中でも、患者と看護師とのコミュニケーションの問題は最も重要な問題の一

つである。医師よりも身近な存在である看護師に、患者は自分の症状等を、生活語である方言で説明するのが少なくない。

本研究は、平成18年度から20年度までの科学研究費補助金萌芽研究「保健・医療・福祉に利用できる方言データベースとコミュ

ニケーションマニュアルの開発」(課題番号 18652044 研究代表者 岩城裕之)をさらに発展させるものである。萌芽研究では、医療現場で方言をめぐって起こる問題の実例を集めるとともに、医療現場で使われやすい方言語彙をデータベース化した。

その過程で、方言主流社会(日常生活において方言が中心的に使われ、共通語との使い分けが難しい状況にある社会)において、方言による患者と看護師のコミュニケーションに困難が大きいことがわかった。引き続き、その実態と解決について考える必要があった。

また、方言データベースを公開したことで、津軽地域ではこの取り組みがマスコミを通じて紹介され、注目をあび始めた時期でもあった。

2. 研究の目的

(1) 方言主流社会での方言による医療コミュニケーションの実態と意識を調査する

医療従事者側、患者側の、病院や医院での方言使用に対する意識調査と、実際の医療現場で、医療従事者と患者との間にどのようなやり取りがあるのか、その実態について詳細な調査を行う。

特に、看護師と患者の間のコミュニケーションに、どのような方言(語、表現など)が出現しやすいのか、単語レベル以上に文・場面とともに明らかにする。

(2) 看護場面でよく使われる方言を調査し、看護教育に役立つようなテキストを作成する

看護師と患者の間のコミュニケーションに、どのような方言が出現しやすいのか、また、地域で最低限必要な方言は何かを調査した結果を受け、最低限必要な方言単語と、簡単なやりとりを学べるテキストを青森で作成する。また、その成果を、青森と同じく方言主流社会とされる南九州(特に鹿児島)地域において検証を行う。このテキストは看護師をめざす学生たちに有益なものとなる。さらに、現在わが国が受け入れている海外からの看護師、介護士向けの手引きとしても使用できる。

3. 研究の方法

(1) 看護場面での方言使用の実態調査と、看護従事者の意識調査を行う。

① 看護現場で最低限必要な方言語彙を抽出していく作業を、看護師への聞き取り調査で実施する。

② よくある問診場面と、問診シナリオを看護師への聞き取り調査、看護学の教科書などから作成する。

③ 上記の作業を津軽(青森県)方言で実施するとともに、津軽と同様の方言主流社会である薩摩(鹿児島県)方言でも調査を行う。

(2) 看護教育への応用を考え、教材を開発する。

① 弘前学院大学看護学部で地域方言に関する講義を行う。

② (1)で行った調査から、映像教材を作成する。

③ 看護教育の場で使用できる方言教材を開発する。ただし、研究期間中に起こった東日本大震災を受け、急遽「非常時に使用できる方言の手引き」作成へ変更した。

4. 研究成果

(1) 医療現場で患者が方言を使用した際、医療関係者が方言を解さないためにコミュニケーションがうまくいかない実態を調査した。その結果、次の事項が明らかになった。

① 方言主流社会であっても、南九州と津軽の実態は異なり、津軽のほうが方言が通じにくい問題が多く生じていること

② EPA で受け入れた外国人看護師、介護士のケーススタディーから、方言に困難を抱えているケースがあることが確認できた。一方、方言が通じにくいことを材料にして、患者とのやりとりが活発になっているケースがあることもわかった

③ 前項2で示したような例をもとに、患者と看護師の間でのコミュニケーションが活発になるようなツールの作成が必要であることが考えられた

④ 研究途中で起こった東日本大震災においても、方言が支援のバリアになっている例があったことを把握した

(2) 看護コミュニケーションに必要な語彙の意味分野が明らかになった。具体的には、「応答」「不快感や症状」「程度や頻度」が緊急性が高く、「身体部位」「動作」などがそれに続く。また、問診場面でよくみられるやりとりについて、シナリオを作成することができた。

(3)以上の結果を受け、次に示すツールを開発した。なお、これらのツールは現在公開している。(一部、準備中のものも含む)

①津軽を対象に、共通語バージョンと方言バージョンの間診場面映像教材を作成した。共通語と津軽方言のやりとりの構造的な違いを対照できるものである。

②看護コミュニケーションに必要な意味分野を明らかにし、災害時を想定した方言の手引きを作成、インターネット上に公開した。この手引きは1枚の紙を折りたたむもので、看護手帳にそのまま挟み込むことができるサイズである。

電気が使えないところでも使用できること、手軽に持ち運べること、被災地以外の物資の不足の可能性が少ない地域で印刷し被災地に持ち込めること、といった、被災地の事情を考慮した結果、このような形になったものである。

(4)本研究の取り組みは、特に方言の手引きについては朝日新聞等のマスコミで紹介され、反響を得た。

また、一連の取り組みは「臨床方言学」として位置づけられ、東日本大震災を受け、人の役に立つ方言学という視点が共有されつつある。先進的な取り組みであったと同時に、今後の大きな展開の可能性を秘めた研究として位置づけられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

①今村かほる、看護・福祉の現場と方言の今後、弘学大語文、査読なし、vol. 38、2012、42-51

②工藤千賀子・榎引美代子、セルフエフィカシーの関連からみた看護大学生2,3,4年次生の社会的スキルの獲得、第21回日本看護学教育学会学術集会抄録集、査読有、2011、145

③今村かほる、方言をめぐる医療コミュニケーションの在り方、医学界新聞、査読なし、2926号、2011、17

④今村かほる、医療と方言、日本語学、査読なし、30巻2号、2011、30-40

⑤今村かほる、医療と方言(8)方言は地域を越える、Ortho Community、査読なし、No. 36、2010、17

⑥今村かほる、医療と方言(7)コミュニケーションの地域差、Ortho Community、査読なし、No. 35、2010、17

⑦今村かほる、医療・福祉と方言 - 津軽の

社会問題として-、地域学、査読なし、8巻、2010、1-18

⑧今村かほる、医療と方言(6)あたりまえのことが伝わらない、気がつきにくい地域差、Ortho Community、査読なし、2009 No. 34、2009、17

⑨今村かほる、医療と方言(4)方言データベースの工夫、Ortho Community、査読なし、No. 32、2009、17

⑩今村かほる、医療と方言(3)方言データベースの開発、Ortho Community、査読なし、No. 31、2009、17

⑪今村かほる、「方言」がもつ医療コミュニケーションの可能性、看護学雑誌、査読なし、Vol73 No. 6、2009、22-29

⑫岩城裕之、医療現場で利用できる方言データベースの開発、呉工業高等専門学校研究報告、査読有、第71号、2009、57-66

[学会発表] (計6件)

①今村かほる、被災地域の方言と医療コミュニケーション、日本ヘルスコミュニケーション学会、2011年9月16日、九州大学

②今村かほる、EPA看護師・介護士候補者における方言の問題、弘前学院大学国語国文学会秋季大会、2011年1月15日、弘前学院大学

③今村かほる・岩城裕之・工藤千賀子・友定賢治・日高真一郎、医療・看護・福祉現場における方言教育、日本語学会 2010年度秋季大会、2010年10月24日、愛知大学

④岩城裕之、医療現場における方言をめぐる「問題」、日本方言研究会 第90回研究発表会 シンポジウム講演、2010年5月28日、日本女子大学

⑤今村かほる・工藤千賀子、看護と方言 津軽方言問診教材の開発、第12回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会 共催医療コミュニケーション教育研究セミナー、2009年11月29日、広島国際大学 広島キャンパス

⑥岩城裕之・今村かほる、よりよい医療コミュニケーションのための方言の「問題」、第12回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会 共催 医療コミュニケーション教育研究セミナー、2009年11月29日、広島国際大学 広島キャンパス

[その他]

ホームページ等

<http://ww4.tiki.ne.jp/~rockcat/hoken/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

岩城 裕之 (IWAKI Hiroyuki)
呉工業高等専門学校・人文社会系分野・
准教授
研究者番号：80390441

(2) 研究分担者

今村 かほる (IMAMURA Kahoru)
弘前学院大学・文学部・准教授
研究者番号：50265138
工藤 千賀子 (KUDOH Chikako)
弘前学院大学・看護学部・講師
研究者番号：70405728

(3) 連携研究者

友定賢治 (TOMOSADA Kenji)
県立広島大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：80101632
日高貢一郎 (HIDAKA Koichiro)
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：30136767